

2018年11月4日 川越教会

人間回復の預言

丸山 勉

[聖書] イザヤ書 56章 1節～8節

主はこう言われる。正義を守り、恵みの業を行え。わたしの救いが実現し
わたしの恵みの業が現れるのは間近い。

いかに幸いなことか、このように行う人

それを固く守る人の子は。安息日を守り、それを汚すことのない人
悪事に手をつけないように自戒する人は。

主のもとに集って来た異邦人は言うな

主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も、言うな
見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。

なぜなら、主はこう言われる

宦官が、わたしの安息日を常に守り わたしの望むことを選び
わたしの契約を固く守るなら

わたしは彼らのために、とこしえの名を与え 息子、娘を持つにまさる記念の名を
わたしの家、わたしの城壁に刻む。その名は決して消し去られることがない。

また、主のもとに集って来た異邦人が 主に仕え、主の名を愛し、その僕となり
安息日を守り、それを汚すことなく わたしの契約を固く守るなら

わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き

わたしの祈りの家の喜びの祝いに 連なることを許す。

彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら わたしの祭壇で、わたしはそれを受け
入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

追い散らされたイスラエルを集める方 主なる神は言われる

既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。

[序] 旧約聖書が伝えてくれるもの

教会は、イエス・キリストこそ、私たちの究極の救いであることを信じる人々の群れ
です。「イエスは主なり」。これは、新約聖書が証言しています。それでは、旧約聖
書というのはキリスト以前の歴史が書かれている書物なのだからあまり意味がな
いのではないか、と思うことがあるかもしれません。しかし、キリスト者にとっ
ても、やはり旧約聖書の価値というものはとても大きいです。

それは一つの言い方をすれば、神様は、私たちの救いを成し遂げるまでに、一い
きなりイエス・キリストが現われたのではなく一どれだけの長い期間、周到な用意を
されてきたのか、その奥行き、その歴史が、旧約聖書を読む私たちに伝わってきます。
昨年この時期、イザヤ書の40章から55章までの中から学びましたが、今回は、

その後、56章以下の、人によっては「**第三イザヤ**」という預言者とされる者（複数の可能性もある）が記した言葉から聞いてゆきたいと思います。ここでは、**神様の救いのスケールの大きさ**が既に語られていると思うのです。

[1] **バビロン捕囚を経ての神様の言葉**

イザヤ書は、全66章からなる、旧約聖書最大の**預言書**です。「預言書」というのは、未来のことを予言するといった意味での「**予言**」の書物ではなく、**神様の言葉を特別に「預かった」者**の手によって記された、という意味での「**預言書**」です。

今日の56章は、時代的には、ユダヤ人の多くの者がバビロニアに連れて行かれたあの「**バビロン捕囚**」という非常に大きな歴史的出来事を経験した後、**ペルシア王のキュロス(クロス)**によって、バビロニアが破れて、結果的にユダヤ人たちが解放されて祖国に戻ってくる、という時代に書かれたと言われています。

「バビロン捕囚」とは、ユダヤ人にとって辛い時期であったことは想像出来ます。「もう神様は私たちを見捨てられたのか?」、「これは神様の声に聞き従わなかったその不信仰ゆえの神様の審判なのではないか?」と、もともと信仰の共同体であるイスラエルは、その神様の愛を疑ったりするような、文字通り**土台を失うような危機**の中に置かれた、と言って良いと思います。

しかし、そのような絶望的な思いを抱きながら過ごしていた60年ほどの年月を経て、全く思いがけずに歴史が動いたのです。難攻不落と思われていたバビロニアがペルシアによって打ち破られ、ユダヤ人たちの帰還が許されたのです。これは**解放の出来事**でしたが、それはまた、**悔い改め**の中で神様の声を新たに聴くことでもあったのです。

56章1節ではこのように語られています。

「主はこう言われる。正義を守り、恵みの業を行え。わたしの救いが実現し わたしの恵みの業が現れるのは間近い。」

この部分は、口語訳では、「**公平を守り、正義を行え**」となっていました。ここで私が思ったことは、**神様は厳しい裁きを語られてはいない**ということです。むしろ、神様は**期待**をされています。「わたしの許に立ち返ってきたからには、あなた方はこうように生きられるはずではないのか」とおっしゃっているようです。正に「**悔い改めにふさわしく生きよ**」ということだと思います。

それには理由があります。「**わたしの救いが実現し わたしの恵みの業が現れるのは間近い**」からです。あなた方は捨てられてはいない。希望を失うな。むしろ、わたしの救いの業を見ることになるのだから、前を向いて行って欲しい、ということでしょう。ここにはもう既に、**神様からの一方的な赦しと恵み**がありますね。

さらに驚くべき言葉が続きます。3節をお読みします。
「主のもとに集って来た異邦人は言うな 主は御自分の民とわたしを区別される、と。
宦官も、言うな 見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。」

ここで、異邦人と宦官という言葉が出てきます。異邦人も宦官も、それまでの理解では神様の救いの「外」にいる者とされてきました。その二種類の者たちに向かって、自分たちのことをつまらない存在だと言ってくれるな、と神様がおっしゃっているのです。ここにおいて、救いというものが、広がってきているのです。単にイスラエルの人々だけとの救いということや、子孫を残せる者たちだけに約束されるものという狭さから、救いが、広く、大きなスケールを持つに至りました。…不思議ですね。神様は「バビロン捕囚」と言うイスラエルの民の最もつらい出来事を用いながら、世界に広がる救いの業を進められるのです。

[2] 「安息日」の二つの根拠

そして、今日の箇所の中で3度も出てくる言葉に注目したいと思います。それは「安息日」という言葉です。2節、4節、6節に出てきます。——宦官も異邦人も、この「安息日」を忠実に守り、神様の契約を堅く守るならば、わたしはあなた方にとこしえの名を与える、或いは、あなた方を、私の祈りの家の喜びの祝いに連なることを許します、と言っています。

これは、その条件を満たせ、そうでなければ救わないと言うよりも、もっと積極的に、あなた方には安息日が与えられているのだから、その日を大切にしなさい、という愛の勧めだと思えるのです。なぜならば、安息日というのは、もともと、人間が人間であるために、神様が特別に備えて下さった、7日間のうちの1日だからです。そこで、少しこの「安息日」について、私たちも受け止め直したいと思うのです。

神様は「安息日を心に留め、これを聖別しなさい」と語られました。これには理由があります。皆様よくご存知なように、「安息日」とは、創世記の1章にあるように、天地創造の7日目に神様ご自身が完全に休まれたとことに基づいています。いわゆる「十戒」の中の第4戒です。出エジプト記の20章11節にはこうあります。

「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」と。

神様は、休まれたのです！ それは、ご自分のためと言うより、人間のためではないでしょうか？ 私たちは、実は、この神様の安息に与ることによって、生きるようにされているのだと思います。

安息日を守る理由でもう一つ忘れてはならないことがあります。それは、出エジプトの出来事との関係で語られています。申命記の5章15節にあります。

「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕

を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。」

[3] 安息日は、人間回復の日

わたしは最近、E・H・ピーターソンというアメリカの神学者の『牧会者の神学』という本を読み返し、とても心に留まったことがありました。それは、この「安息日」というものが、人間にとってどれほど大切な時なのか、ということについてです。

ピーターソンの言葉をいくつか引用させていただきます。今の申命記の言葉との関わりですが、こうあります。

「エジプトにおいてイスラエルの先祖たちは400年間、一日たりとも休みがなかった。その結果、もはや人々は人格を持った人間ではなく、**奴隷**と見なされるようになった。彼らは働く「手」であり、「労働ユニット」であって、**神の似姿に創造された人間ではなく、レンガを作り、ピラミッドを建設するための装置に過ぎなかった。**私たちの隣人、夫、妻、子ども、また雇い人など、誰に対してであろうと、そのような**人間性の否定が起きないようにするために、安息日を守る**ことが命じられているのである。」——つまり安息日は、**神様に作られた人間の、人間回復の日**なのです。文字通り、**捕らわれ(捕囚)からの解放**なのです。

そして、ピーターソンは『牧会者の神学』の中で、少し皮肉めいたことも言います。それは、牧師も、人には信仰問答などで安息日の遵守を教えていながら、あなたは**仕事中毒による「安息日破り」**を行っていないだろうか、その熱心さがあたかもあなたの敬虔さであるかのようにみせびらかしていないだろうか？ということを目指するのです。そして言います。

「安息日。それは私たちが**神の臨在と神の業を知るために、自分の行為に熱中することから離れて時間と空間を整理すること**である。もし私たちが週に一度、規則的に仕事を休むことがなければ、**私たちは自分自身の存在をあまりに重苦しく受止めざるを得なくなる**ことだろう。」——これはとても大切な事ではないでしょうか？

さらにこのように語ります。

「安息日を守ること。それは、**私たちの主のかすかな小さい声を聞き取れるように、私たちの内なる騒音を静めること**である。そしてまた、それは**キリストの臨在を見分けられるように、私たちの高慢を取り去ること**である。」

そして続けます。「安息日。それは、詮索やお節介によってからみついてくる人間関係から離れて、**時間と空間を整理すること**である。人間は他者に依存することから自由でなければならず、また人間はいつでも**他者によって「操作」されるようなこと**から自由でなければならない。」

…今の世の中、人間疎外が満ちている、とも言えるのではないのでしょうか。過重労働、パワハラ、スマートフォンやSNSなどによる時間と空間の侵害など、息苦しくなる要素は溢れています。そんな中で、教会は何が出来るのでしょうか？——先ほどのイザヤ書の56章の言葉が目に留まりました。——主のもとに集って来た異邦人が 主に仕え、主の名を愛し、その僕となり 安息日を守り、それを汚すことなく わたしの契約を固く守るなら わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き わたしの祈りの家の喜びの祝いに 連なることを許す。…わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」

この中で、「私の祈りの家の喜びの祝い」という言葉、いいなあ、と思います。祈りの家には、喜びの祝いがあるというのですね。また「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」という言葉がありました。「すべての民、全ての人」のための家です。教会は、正に祈りの家です。教会のかしらでいらっしやるイエス様がおっしゃっているのです。マタイ 11:28。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。

イザヤが預言した預言の言葉は、このイエス様によって実現したのです。このお方は、誰よりも、私たちの弱さ、私たちの罪、また疲れきった心もご存知のお方です。

このお方の前に、裸の心になって本当に出て行くこと、そこで、このお方が丸ごとのわたしを受止めてくださっている事を知ること、それに優る安息はないのではないのでしょうか!?

神様は、この祝いの喜びに、すべての人を招いていて下さっています。

「神様、救われる人は少ないのですか？」などと問う必要もないのだな、と思いました。何故なら、神様ご自身が、

「追い散らされたイスラエルを集める方 主なる神は言われる 既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。」おっしゃっていて下さっていますから。

[結] 先を行っている神様の後に行く

こういうことを思いますと、私は、神様はいつも先を行っているなあ、と思うのです。主イエスはこんなことをおっしゃいました。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」(マタイ 6:8) 本当に、神様はいつも、私たちに先んじて、良きものを与えて下さるお方です。

今日は、この後、主の晩餐式も行います。これも正にそうですよね、イエス様ご自身の思いから実現しました。弟子たちに「前からあなた方とこの食事をしたいと切に願っていた」とおっしゃって、場所までご自分で整えて、あの晩餐式を行って下さいました。あそこで備えられたパンと杯は、ご自分がこのあとすぐ十字架にか

かられる、あの**主の体と血潮**を表すものですよね。つまり、これから死んでいく方自身が、私たちの救いのためにあの食卓をリードして下さったのですね。

死んで、復活されたイエス様も、弟子たちに“**先んじて**”ガリラヤに行っておられました。そこで再び会うことが出来ると。主は、いつも私たちの先へ、先へ行かれています。でも、だからこそ、安心ではないでしょうか？**私たちはいつも、このお方の後を見、その後に従ってゆけば良い**のですね。

常に主の許に立ち返る真の「安息」を頂きながら、そして、共に祈る喜びを新たにさせて頂きながら、この新しい月も一緒に進みたいと思います。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、感謝致します。

この新しい月も一緒に礼拝に与ることが出来ました。それはあなたが私たち一人ひとりを招いて下さったからです。御腕を広げて、「私のもとに来なさい。休ませてあげよう」と、今日も私たちに招きの声をかけて下さいます。今、あなたの許に、私たち自身を差し出します。真の安息をお与え下さい。

あなたはどれだけの大きな愛を持って、この世界を、そして私たちを憐れんで下さっていることでしょうか！主よ、たえず、あなたの声を聞く耳をお与え下さい。そして、共に信仰に生きる者たち、共に祈りあえる仲間を与えてくださり、感謝致します。

今日、ご事情でこの礼拝に出席できない方の上にも、あなたの聖霊の慰め、またお励ましがありますように。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。